

「台湾を築いた明治の日本人」（渡辺利夫著）の紹介

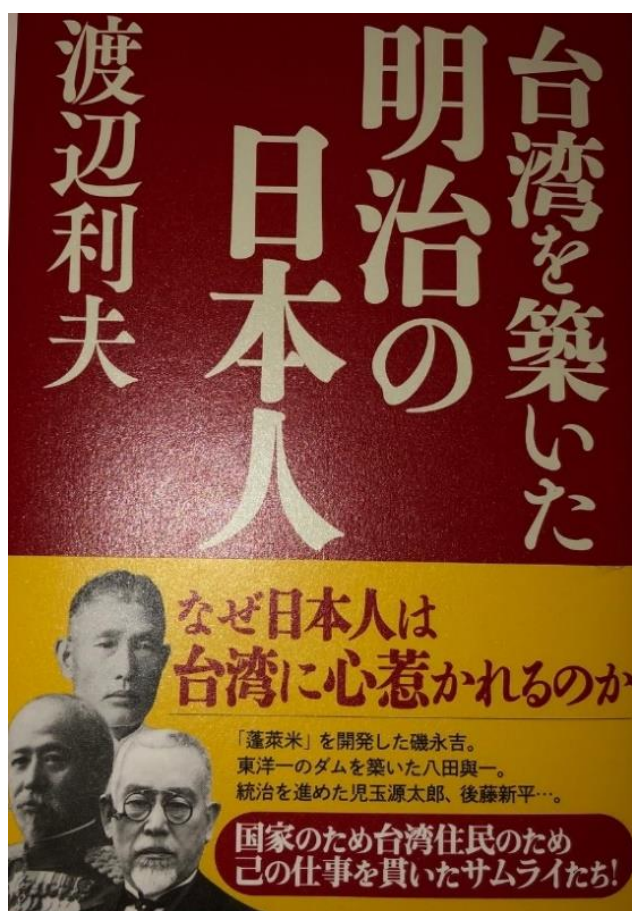
宮原 豊（9組）

これは2019年1月～12月まで月刊「正論」に連載された「小説 台湾～明治日本人の群像」を基に加筆・修正され、装いも新たにノンフィクション・ノベルとして上梓された本です。出版社：産経新聞出版、価格：1800円＋税。経済学者が丹念に調べ上げた歴史的事実をもとにした初の小説です。

著者・渡辺利夫先生は拓殖大学の前総長・元学長です。ご存知の通り元々台湾の開拓・殖産興業のために創立された大学で、多くの国際人が輩出されております。

渡辺先生は「日本李登輝の会」会長に就いているそうです。

この本の中の第2章「蓬莱米が起こした『緑の革命』」は、20年以上の歳月を蓬莱米開発に捧げた磯栄吉博士との思いがけない縁により、後にインドに蓬莱米を導入・栽培に成功することになった杉山龍丸の話です。インド北部の砂漠の緑化に取り組んでいた龍丸は、インドの飢饉・飢餓を目の当たりにして、台湾と同じような緯度にあるインド・パンジャブ州に、台湾で収穫量増に成功していた蓬莱米を導入しました。そして、盟友のスシル・クマール氏により栽培に成功します。龍丸が台湾とインドを結んだ縁は、実は龍丸の祖父・杉山茂丸（明治政界の大御所）によるインド・台湾の両国との深い縁が龍丸にも連なっています。茂丸は孫文の活動を支援したことが知られており、また日本に亡命したインドの独立の志士ラース・ビハリ・ボースとも親交がありました。不思議な縁が次々に繋がるものだと感動します。



磯永吉博士、末永仁^{めくむ}博士が、台湾で何十年も研究に取り組んでこられた蓬莱米(ジャポニカとインディカの掛け合わせ)は台湾の食糧事情を飛躍的に向上させました。末永仁と磯栄吉の他に、八田與一(烏山頭ダム)、児玉源太郎(4代台湾総督)、後藤新平(総督府民政長官)等々の台湾で活躍した人物がこの本の主人公ですが、「インドのグリーンファザー杉山龍丸」と蓬莱米を、台湾の物語の糸口としているところがユニークです。

数年前のことですが、蓬莱米をインドに導入・栽培に成功した杉山龍丸のことを渡辺先生は追跡しておりました。それで「夢野久作と杉山三代研究会」との繋がりができたそうです。私は杉山龍丸の子息・杉山満丸氏との関係で杉山三代研究会に関わり、そこで渡辺先生と28年振りに再会することとなりました。渡辺先生が筑波大学や東工大の開発経済学の教授をされていた頃に、マニラから帰国した私は先生をリーダーとする「アジアの開発」研究グループの一員でした。なんという僥倖でしょう。

今年3月、雑誌「サライ」のコラム「奇想転画異」(五木寛之による第51回話)に杉山龍丸の話が紹介されています。その中に「夢野久作と杉山三代研究会」会報6号について紹介されていますが、ここに私の論文が掲載されています。渡辺先生は第6回研究会の基調講演でこの「小説・台湾」の構想を紹介されました。

今回の中国発の武漢肺炎ウィルス騒動の中で見た「一党独裁」がどのようなものであるか、その対応は全て嘘八百の教宣であります。今、香港の人たちは苦境に立たされています。チベットやウイグルは名ばかりの自治の下で独自の文化どころか民族そのものが存続の危機に立たされていますが、我々もボーっとしてはられません。世界を覆う見えない脅威が顕在化しました。我々にとって台湾はますます重要な国となっています。

